

雑誌『明星』における男性アイドル観の形成 — スポーツと恋愛を中心に —

The formation of Japanese male idols views in Myojo magazines — Focused on consideration of sports and love —

田 中 卓 也

概要

本研究では、芸能雑誌『明星』（集英社）を取り上げ、多くの女性ファンの心をつかむことに成功した男性アイドルについてとりあげ、男性アイドル観がどのように形成されたのかについて考察・検討を試みるものである。また男性アイドルが、「スポーツ」と「恋愛」について、どのように結びついていくことになったのかについて見出すものである。

1960年代初頭にジャニー喜多川が手掛けた4人組グループの「ジャニーズ」が「野球」を通じて交流した若い青年が最初のジャニーズタレントになって以降、現在に至るまで、多くのタレントを排出した。彼らは「野球」をはじめ、様々なスポーツと関わるなかで、若い女性から人気を博すことになった。女性にとっての男性アイドル観は、「新御三家」に始まり、「たのきんトリオ」の登場で形成されはじめ、「SMAP」に至るまで以後多くの女性から愛される（恋愛対象としての）存在になっていった。『明星』誌は、スポーツと恋愛が女性ファンと結びつける装置としての機能を有した。

キーワード：明星， ジャニーズ， 新御三家， たのきんトリオ， 読者共同体

- I. はじめに — 本研究の目的と先行研究の検討 —
- II. 雑誌『明星』の誕生とジャニーズ結成
- III. 「女性に人気のアイドル」の育成 — 「新御三家」、「たのきんトリオ」、「SMAP」まで —
- IV. 雑誌『明星』から『MYOJO』へ
- V. 『Myojo』における男性タレント像 — スポーツと恋愛との関連で —
- VI. おわりに — スポーツと恋愛に結ばれた男性アイドルの育成 —

I. はじめに

—本研究の目的と先行研究の検討—

本研究では、芸能雑誌『明星』(集英社)を取り上げ、多くの女性ファンの心を魅了した、男性アイドル観について考察・検討を試みるものである。また男性アイドルが、「スポーツ」と「恋愛」について、どのように結びついていくことになったのかについても、見出したい。

さて、西原麻里によれば、ジャニーズに代表される男性アイドル文化は、現代日本の女性向けポピュラーカルチャーのなかでもとくに大規模なジャンルの一つであると位置づけている¹⁾。辻泉によれば、女性雑誌『an・an』(マガジンハウス)では、ジャニーズ事務所所属のタレントといった男性アイドルを「好きな男」や「抱かれない男」として世に送り出したことから女性ファンが男性アイドルと強固な恋愛関係を想定していることを指摘している²⁾。さらに田島悠来においても、2002(平成14)年から2012(平成24)年までの『Myojo』の記事分析を通じて、「理想の恋愛対象として描き出されることにより、『女性の視線』に向けて理想化された性イメージを付与され」、また『『ジャニーズ』と読者との一対一の『疑似的な恋愛の場』として、誌面で異性愛主義をその根底に据えることにより異性愛秩序の再生産が行われている」と述べている³⁾。

このようにジャニーズアイドルは、女性にとって理想の恋愛の相手としての役割を担うものとして認識されている。しかし2000年代以降を見てみると、人気を博している東アジア圏の男性アイドルの姿は、異性愛のメッセージとならんでメンバー同士の強い友情や信頼関係、あるいは男性同士で“恋愛”関係

にあるようにも読み取れるような表現によって映しだされていることが珍しくない。

また、男性同士の関係を“恋愛”で読み換える、いわゆる「やおい/BL(ボーイズラブ)」で男性アイドルをみる欲望のあり様は、吉澤夏子や吉光正絵等の研究で論じられている。このような状況をみると、男性アイドルとはかならずしもファンが仮想する恋愛の相手というだけではない、別の機能も不可欠とされているのではないかと考えられる。

本研究では、『明星』に焦点をあて、誌面を飾ってきたジャニーズ所属の男性アイドルに焦点を当て、男性アイドル観の形成に注目するとともに、その特徴を見出すことに努めたい。

II. 雑誌『明星』の誕生とジャニーズ結成

(1) 雑誌『明星』の刊行の経緯

雑誌『明星』は、1952(昭和27)年4月に創刊された⁴⁾。創刊号の表紙は女優津島恵子を起用し、「夢と希望の娯楽雑誌」をサブタイトルとしたものであった。同誌は徐々に売り上げを伸ばし、1970年代には100万部に達した。集英社の看板雑誌にまで成長した同誌は、ライバル誌であった『平凡』(マガジンハウス)や『近代映画』(近代映画社)などスタア・アイドル雑誌はあったが、175万部を記録するまでになった。

(2) ジャニーズの結成と『明星』

『明星』は、いまや発刊されてから60余年が経過するが、これまでに数多くのスタアやアイドルを誌面に掲載した。なかでもジャニーズはその代表格といえる。

1) 西原麻里「現代の男性アイドル像と〈恋愛〉／〈絆〉の様相—雑誌分析を通じて—」(日本マスコミュニケーション学会・2014年度春季研究発表会・「研究発表論文」1～6ページ)。

2) 辻泉「関係性の楽園／地獄 ジャニーズ系アイドルをめぐるファンたちのコミュニケーション」(東園子・岡井崇之・小林義寛・玉川博章・辻泉・名藤多香子『それぞれのファン研究 I am a fan』風塵社、2007年、243～249ページ)。

3) 田島悠来「雑誌『Myojo』における〈ジャニー

ズ〉イメージの受容」『国際基督教大学ジェンダー研究センター』(2013年、53～81ページ)。

4) 田島は雑誌『明星』について、2002年から2012年までの時期を中心に読者における同誌の誌面構成はじめ、読者の意識形成や精緻な研究を行っている。また「1970年代の『アイドル』文化装置としての雑誌『明星』」(同志社大学博士論文〈メディア学〉、2014年)も執筆されている。

ジャニーズの結成は、ジャニー喜多川が在日アメリカ軍施設であったワシントンハイツ（いまの代々木公園周辺一帯）に少年を集めて野球を行ったことに由来している⁵⁾。ジャニー喜多川の命名によるこの野球チームは、「オールエラース」や「オールヘターズ」という名称が最初であったが、のちに「ジャニーズ少年野球団」というチームとして発足した。

以後、ジャニーズ事務所においては、事務所所属のアイドルらを集め、「新潟中越地震」（1994年）や「東日本大震災」（2011年）のチャリティの場として活用されている。また、1994（平成6）年より「ジャニーズ大運動会」を始めており、ジャニーズ総出のスポーツの祭典についても行っている。この企画のメインは「ジャニーズ野球大会」であり、ジャニーズと野球との結び付きの強さを印象づける。以後この企画は、2004（平成16）年までの10年間継続した。

しかしその後もスポーツ企画は形を変えながら、ジャニーズタレント企画として進められている。たとえば、元SMAPリーダーの中居正広や、KATTUNの亀梨和也、さらにはジャニーズjrで従来の野球好きという者が存在し、番組などを通じて野球に取り組みながら、交流関係を構築している姿は、よくブラウン管で見かけられ、脈々と受け継がれている。

（3）ジャニーズのアイドル路線志向

少年野球チームのメンバーから、あおい輝彦、真家ひろみ、飯野おさみ、中谷良からなる4人組の初代「ジャニーズ」を結成し、芸能活動を開始することになる。野球を通じて

の日本の民主化とそれともなう日米の深い交流を求めるといった意味があったものと推察される⁶⁾。

（4）「歌って踊れるアイドル」の育成

ジャニー喜多川は、そのなかで初代ジャニーズと野球を通じて心通わせていくことになるが、舞台にも関心をもっていたジャニーは、ある雨天の日に、彼ら4人とともに、「ウエストサイドストーリー」を鑑賞したところ、4人が殊の外感激し、そのタイミングで彼らにダンスを進言したところ、彼らは意欲を見せたという。

以降、ジャニーズのメンバーにはダンスの練習が習慣化されていくことになった。ジャニーズの快進撃はこれにとどまらず、1957（昭和32）年12月31日のNHKテレビ（総合）の放送した「紅白歌合戦」に初出場を果たし、「マック・ザ・ナイフ」をうたい上げた。まさに「歌って踊れるアイドル」の誕生の瞬間であったといえよう。

当時の芸能界は「GSブーム」が到来していた頃とも重なり、堺正章、井上順、かまやつひろし在籍の「ザ・スパイダース」や萩原健一の在籍した「テンプターズ」、沢田研二、岸部一徳・岸部シロー（岸部四郎）兄弟が在籍していた「ザ・タイガース」など数多くのグループサウンドズが相次いで誕生した。この流れに押し切られるように、初代ジャニーズは、1968（昭和43）年に6年間の活動に終止符を打つことになった。またそのグループサウンドズ旋風も1970年代に入ると、徐々に衰退していくこととなった。

5) ジャニー喜多川は、1931（昭和6年）にアメリカ合衆国ロサンゼルスにて誕生した。1960（昭和35）年初頭ごろに、東京渋谷の占領アメリカ軍宿舎「ワシントンハイツ」において、約30名の少年らで構成した野球チームを経て、「ジャニーズ少年野球団」が結成された。このチームメンバーから選抜された4名がのちの「ジャニーズ」として結成された。以後、彼は男性アイドル事務所として「ジャニーズ事務所」を1965（昭和40）年に設立し、「フォーリーブス」、「郷ひろみ」、「たのきんトリオ」、「シブがき隊」、

「少年隊」、「光Genji」、「SMAP」などを誕生させた敏腕プロデューサーとして知られた。2019（令和元）年6月18日、体調不良を訴え入院し闘病を続けたが、同年7月9日に87歳で生涯の幕を閉じた。彼のポリシーは「ショーマスターゾーン」（ショーはたとえどんな場合でも、続けなければいけない）という言葉でも知られている。

6) あおい輝彦は、現在俳優・タレントとしても知られ、TBS系時代劇の「水戸黄門」の「助さん」役で好評を博した。

Ⅲ. 「女性に人気のアイドル」の育成

一「新御三家」、「たのきんトリオ」、[SMAP]まで

(1) 新御三家の登場と女性ファンの熱気

1972 (昭和47) 年を迎えると、『明星』の誌面には郷ひろみ、野口五郎、西城秀樹の3人を中心とした記事が数多く掲載されるようになる。彼らを当時は「新御三家」とよび、当時の女性ファンから人気を獲得していた。それを裏づけるものとして、当時の『明星』の表紙掲載数をみると、1970年代には、郷ひろみが29回、野口五郎が15回、西城秀樹が13回と当時のベスト3となっている⁷⁾。ライバル雑誌の『平凡』においても三人はその大半を表紙で飾っており、二誌をあわせよそ50%以上であったといわれる。

『明星』誌においても、同じように「新御三家」を取り上げている。「ヤングアイドル座談会」(野口五郎、伊丹幸雄、郷ひろみ、1972年第21巻第6号)、「いちばん親しい女性20人が語る 野口五郎の意外な素顔」(同誌第21巻第9号)、「きみは野口五郎君の恋人になれるか?！」(同誌第21巻第10号)、「追跡! 郷ひろみwithフォーリーブスのバツバツ旅行」(同号)、「あっ! Wデート対談 郷ひろみ、麻丘めぐみ、野口五郎」(同誌第22巻第4号)、「足ながデート対談西城秀樹、小林麻美」(同号)、「友情の17歳ライバル特集 野口五郎、郷ひろみ、西城秀樹」(同号) など誌面に多く登場した。

さらには「野口五郎=森昌子 五郎ちゃん、あの500円返してえ」、「郷ひろみ=アグネスチャン 二人は愛への出発をした」、「西城秀樹=麻丘めぐみ はーい! ぼくたち同級生同じ電車で通学します」(同誌第22巻第7号)にあるように、当時の人気女性タレントとのデート企画などがしばしば掲載され、ますます新御三家の女性ファンを獲得するような方策もとられた。

西城秀樹でいえば、1979 (昭和54) 年に自身の最大のヒット曲「ヤングマン—YMCA—」を発売し、当時のTBS放映の「ザ・ベストテン」で前人未達の「9,999点」という得点を叩き出している。西城の当時のすさまじい人気ぶりをうかがわせる。その西城も昨年5月に63歳の生涯でこの世を去ることになった。大変残念であり、悔やまれる出来事となった。

『明星』誌は当時の人気アイドルを誌面上で交際させ、ファンを獲得させる工夫を凝らした。

(2) 「新御三家」の時代から「たのきん」の時代へ

1980年代を境に、『明星』の誌面は、それまでの郷、野口、西城の「新御三家」に変わり、田原俊彦、近藤真彦、野村義男3名の新生十代アイドル、いわゆる「たのきん」トリオが注目を浴びるようになった⁸⁾。1979 (昭和54) 年にTBSで放映された学園ドラマ『3年B組金八先生』のヒットが大きな影響を与えていたことが大きい理由である。

「たのきん」の3名はこれまでの男性アイドルと異なり、3名ともにジャニーズ事務所所属タレントであり、レコードの売り上げやコンサート集客数、彼らの主役の映画などで興行収入を上げることに成功した。たのきんトリオの登場の前までの時期を、先述の矢野利裕は、「ジャニーズ冬の時代」という言葉で表現している。それは新御三家の一人であった郷ひろみが、1979 (昭和54) 年に突如理由もないまま、ジャニーズ事務所を退社したことで、郷の後継者となるタレントを発掘しなければならなかった苦悩の時期があったというものであった。

そこでドラマのヒットで一躍名が知れるようになった「たのきん」の人氣が、急上昇したことが、大きな幸運であったといえる。「た

7) 発刊後約30年における雑誌『明星』を飾った輝かしい表紙の変遷などについては、橋本治『「明星」50年 601枚の表紙』(集英社新書、2002年)が詳しい。

8) 「たのきんトリオ」とそれを取り巻くファンと

の関係については、拙論「1980年代『平凡』における読者意識の形成と若者文化—『たのきん(トリオ)』に熱狂する読者等と廃刊をめぐる—」(『共栄大学研究論集』第14号、2016年、1~8ページ)を参照されたい。

のきんトリオマッチ誕生パーティー座談会」(同誌第31巻第9号)、『3年B組金八先生 博多⇄東京追跡取材』(同誌第29巻第11号)をはじめ、誌面においても「たのきん」を取り上げる記事が目立つようになった。

その後田原は、「グッド・ラックLOVE」(1981年公開)、「ラブ・シュプルーージェミニYとSー」(1983年公開)を、近藤は「スニーカーぶるーす」(1980年公開)、「ブルージーンズ・メモリー」(1981年公開)、「ハイティーンブギ」(1982年公開)などがそれであった。

また田原は近藤、野村よりも実年齢が3才上であることから、「宮下智さんちへ音楽修業」(同誌第31巻第1号)、「ドイツ、メルヘン紀行 夢や! 踊れ」(同誌第33巻第7号)のように、ダンス上手な一面をみせながら、長男坊的な役割を果たし、近藤は「男びかびかファッション大研究」(同誌第33巻第3号)、「一番野郎は、3・29武道館へ全速前進」(同誌第33巻第5号)、「夏にけじめつけるぜ! 沖縄宣言」(同上)にみられるような、すこしやんちゃなファッションボーイ、そして野村は「九州ライブで真剣勝負」(同誌第31巻第6号)、「今度はロックでパリ公演さ」(同誌第31巻第10号)、「映画主演とライブ ついに翔んだぞ」(同誌第32巻第1号)などのように、どこの学校にでも存在あうような、ライブ好きな、ギター少年のイメージを備えていたところが見受けられる。

そのような彼らはやがて、「たのきん全力投球」(TBS 1981年～1983年)という冠番組を担当し、そこで多くのファンを前にスポーツやコントにとり組んだり、ヒット曲をひっさ

げファンらを魅了していくことになった。

「たのきん」に関する恋愛関連記事も色濃いものであり、「トシちゃんは結婚2回? 私は1回! 田原俊彦・松田聖子」(同誌第32巻第8号)、「マッチは、好きな子をいじめるタイプ!? 近藤真彦・松本伊代」(同上)、「女の子に話しかけたい気分だね～ 近藤真彦」(同上)「な、俺がプロポーズの実験台だろ?」(同誌第31巻第1号)、「おまえってよべるのは、おまえだけ 田原俊彦・松田聖子」(同誌第33巻第4号)などから見れば想像できよう。また「トシとマッチが激突! 甲子園野球大会に、1,800名をご招待」(同上)といわれるような、田原と近藤の甲子園での野球対決についておよそ1,000名を超える多くの読者にプレゼントするような広告も見られた。

(3) たのきん解散後のジャニーズの面ターシブがき隊、少年隊、光GENJI、SMAPを中心に—

「たのきんトリオ」の解散は、1981(昭和56)年夏に突如訪れた。しかし解散後も3人はソロ活動を展開し、安定した人気を誇るようになった。

この「たのきん」に変わり、新たに登場したのが、「シブがき隊」、「少年隊」らであったが、前者はスポーツアイドルのイメージとは程遠く、また後者は、ダンスの腕前を魅了するような三人組として登場した⁹⁾。1986(昭和61)年にデビューした7人組アイドル「光GENJI」は、ローラースケートを履いたまま、踊って歌うという新たなスタイルのアイドルとして登場し、その跡を継いだ6人組アイド

9) 「シブがき隊」は薬丸裕英、布川敏和、本木雅弘の3名によって構成されていた男性アイドルグループであり、1982(昭和57)年に「NAI NAI 16」でデビューを果たした。結成はTBS系ドラマ「2年B組金八先生」出演が機会となり、「仙八トリオ」、「悪ガキトリオ」と呼ばれることになった。しかし集英社雑誌『セブンティーン』による一般公募により、「シブがきトリオ」を経て、「シブがき隊」になった。「隊」への変更は生みの親と称されるジャニー喜多川の進言によるといわれる。1988(昭和63年)8月の東京港青年会館でのコンサートで「解散宣言」を発表

し、同年12月解散している。解散後は薬丸は司会業に、布川はタレント、本木は俳優業に転身を果たし現在活躍中である。「少年隊」は、錦織一清、植草克秀、東山紀之の3名からなる男性アイドルグループである。たのきんトリオのバックダンサーとして活躍していたが、1985(昭和60)年に「仮面舞踏会」でレコードデビューを果たし、うなぎのぼりの人気となる。のちに活躍の場を「劇場」に移し、ミュージカルにも多数出演した。解散はしておらず、現在も活動中である。まもなく結成40年を迎える。

ル「SMAP」は、「SPORTS」の「S」、「MUSIC」の「M」、「ASSEMBLY」の「A」、「PEOPLE」の「P」の頭文字をとって命名され、スポーツと音楽のできるアイドルとして、登場することになった¹⁰⁾。

かくしてジャニーズ事務所は、野球のみならず、「ダンス」や「ローラースケート」をふくめた「スポーツ」全般を通じて、歌って踊れるアイドルの育成が行われていたことが誌面からもうかがえる。

IV. 雑誌『明星』から『MYOJO』へ

そもそも『Myojo』は1952年以降に『明星』として創刊した雑誌で、1992（平成4）年よりこのタイトルとなってからも今もおも継続刊行されている。

『Myojo』は、読者投稿ページなどいくつかの情報コーナーを除き、大半がカラーページで構成されている。そのほとんどにアイドルの姿を映したグラビアが掲載され、同時に彼らのインタビューやアンケートなどが文章で掲載される。なかにはほとんどグラビアのみのページもあることから、『Myojo』が視覚的表現を重視していることが伺えるといってもよいであろう。

V. 『Myojo』における男性タレント像

—スポーツと恋愛との関連で—

明星誌における男性アイドルは、スポーツをする若い青年らにスポットがあたり、いまなお継続している感がある。先述したジャ

ニーズを皮切りに、御三家、たのきんトリオらと受け継がれてきている。またスポーツと同じく、恋愛対象としても男性タレントはとりあげられた。それは表紙や対談などにもみられる。『明星』では「コンビ」や「カップル」が多数のメンバーによって総当り的に組み合わせられているほか、3名以上による“恋愛”関係が描き出される場合もあった。それは自由で流動的な関係性が描かれているのである。また、男性アイドルたちがさまざまなスタイルで女性読者のニーズに応える言説空間においても、憧れの存在たる男性アイドルと女性ファンとの関係性はかならずしも従来の異性愛関係に則ったものではない。こういった言説の背景には、女性が積極的に男性を選びだす（あるいは“萌え”る）という、男性同士の友愛関係を愛でる視線が関係していると考えられる。

先述の田島によれば、『Myojo』言説空間での男性同士の“恋愛”はあくまでも「妄想／モーション」として位置づけられているし、アイドルたちが「好みの女性のタイプ」や「理想のデート」を語る形式が多くみられることから、それに読者がみずからを適合させていったようである。

現在の男性アイドルは、女性にとって身近なレベルで、自分の好みと合致させやすい存在であると同時に、自分と異性愛関係を結べない存在としても認識・構築されているといえる。

¹⁰⁾「光Genji」は、1980年代後半から、1990年代前半にかけて活動した日本の男性アイドルグループであり、内海光司、大沢樹生、諸星和己、山本淳一、赤坂晃、佐藤敦啓の6名から構成されている。ローラースケートを履きながら歌うというスタイルが特徴で、当時の「チャゲ&飛鳥」の飛鳥涼によるプロデュースのデビュー曲「STAR LIGHT」は爆発的ヒットを飛ばした。1988年には「パラダイス銀河」で日本レコード大賞に輝いている。その7年後の1995（平成7）年に解散している。

「SMAP」は、1988（昭和63）年に結成した日本の男性アイドルグループである。中居正

広、木村拓哉、稲垣吾郎、森且行（途中で脱退）、草彅剛、香取慎吾の6名から構成されていたが、1995（平成7）年にオートレーサー志望であった森がグループを脱退し、以後は解散時まで5名で活動した。もともとは「光Genji」のバックダンサーで歌っていた「スケートボーイズ」のうち、6名が選抜され、結成された。2016（平成28）年12月に解散するまで、テレビやCD販売、コンサートなどさまざまな方向で活躍した。「がんばりましょう」、「夜空ノムコウ」（ミリオンヒット）、「らいおんハート」（ミリオンヒット）、「世界一つだけの花」（SMAP最大のヒット曲）などは有名である。

VI. おわりに

—スポーツと恋愛に結ばれた男性アイドルの育成—

『明星』における男性アイドル観がいかにか形成されてきたのかについて、1960年代から1990年代の時期にかけて考察・検討してきた。

1960年代に登場した「ジャニーズ」は「野球」を通じて交流した若い青年たち「野球チーム」から選ばれた、4人で構成されたのが契機となった。すなわちジャニーズ事務所初の4人組アイドルとして誌面にも掲載された。ジャニー喜多川が手掛けたアイドルの嚆矢といえる。彼らはその後、有名スターのバックダンサーとして華々しくデビューを果たし、紅白歌合戦にも出場した。70年代にかけてGSの流行とともに、同グループは解散することになったが、「新御三家」の登場でアイドルの時代が途切れることなく、築かれていくことになった。郷、野口、西城ら男性アイドルは、『明星』の誌面にも数多く登場し、女性ファンの心を虜にすることになっていった。彼らアイドルは、誌面において女性との交際企画やスポーツ企画を通じて、ますます女性ファンを増加させていくことになった。

郷のジャニーズ事務所の退社とともに、「ジャニーズ冬の時代」を一時期迎えるが、「たのきんトリオ」の登場で、その穴はうめられることになった。田原、近藤、野村で構成された同グループは、女性ファンをさらに獲得させていった。ジャニーズ事務所の出身の三人の活躍は、以後男性アイドルといえ、ジャニーズ」という線路を敷いたことになった。彼らもまた、誌面に多く登場し、野球大会をはじめとした、スポーツ企画やデート対談などをはじめとする恋愛企画にも登場することになった。

「たのきんトリオ」の解散後、シブがき隊、少年隊と、ジャニーズ系アイドルが相次いで登場することになるものの、スポーツと恋愛の概念は、タレントおよびグループの性格などでやや薄れる傾向にあったが、光Genji、SMAPの登場により、再びスポーツと恋愛のイメージを抱かせる、アイドルが登場してきた。双方のグループともにすでに解散し

ているが、90年代以降は、『明星』という名称も『MYOJO』に改称されることになり、「ジャニーズタレント専門雑誌」として販売されていくようになった。

【引用文献・参考文献】

- (1) 『明星』(集英社、1963年～1992年) 国立国会図書館東京本館所蔵資料。
- (2) 矢野利裕『ジャニーズと日本』(講談社現代新書、2016年)、3～5ページ。
- (3) 中川右介『SMAPと平成』朝日選書、2016年。
- (4) 橋本治『「明星」50年 601枚の表紙』集英社新書、2002年。
- (5) 阪本博志『「平凡」読者の連帯と戦後大衆文化』『マス・コミュニケーション研究』第60号、122～125ページ、2002年。
- (6) 阪本博志『平凡』の時代 1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』昭和堂、2008年。
- (7) 田中卓也「1980年代『平凡』における読者意識の形成と若者文化—『たのきん(トリオ)』に熱狂する読者等と廃刊をめぐる—」『共栄大学研究論集』第14号、2016年、1～8ページ。
- (8) 田中卓也『「近代映画」における読者意識の形成と若者文化』(静岡産業大学『環境と経営』第25巻第1号、【研究ノート】)、2019年。
- (9) 田島悠来「1970年代の『明星』読者ページにおける読者共同体—『ハローキャンパス』の事例分析を中心に—」『評論・社会科学』同志社大学、2012年。
- (10) 田島悠来『アイドルのメディア史—明星とヤングの70年代—』森話社、2017年。



『明星』1967年7月号表紙



『明星』1986年9月号表紙

※国立国会図書館デジタルコレクション所蔵。